

れた。上述の高木、吉江、藤原、窪田の諸先生の他東大の中川銓吉先生、東北大の林鶴一先生、東京文理科大学の国枝元治先生、京大の園正造先生など殆んど毎年御出席になり中でも林、園、掛谷三先生はいつも話題の中心になられて極めて愉快的話がでてたのしい会であつた。それらの先生方の他に先輩後輩が多数、といつても実は二十名足らずであつたが、集まれた。何分、小人数なので親密の感が深くてよかつた。その点では現在の様に会が大きくなつてしまうと数学会という風に限定されながら同じ研究発表にきていても大部分の顔もしらないのとは大きなちがいであつた。その会はこういう集会のお好きであつた掛谷先生が主張されて開かれたものらしく私はその指図のもとで毎年幹事のような役割をしてきた。年会における研究発表よりもこの会の方がたのしみであつたのは私ばかりではなかつたようである。このような会合は数年つづいたがそのうちに学会の方は漸次大きくなり会員も増加すると、この会に集まるものも一部の人々ということになり次第に意味がなくなつて、いつのまにか催おされなくな

つてしまつた。惜しいというよりは会が発展したのだと思えばあきらめのつくことであろう。

そしてその代りに学会の正式の晩餐会へ数学の方々も、勿論一部の方々ではあるが、でるようになり、私もこの会へはよく出席した。私が大阪へきてからこの会ではよくテーブルスピーチなどやらされたが、最も思い出の深いのは、たしか五十周年記念のときの会ではなかつたかと思うが、藤澤利喜太郎先生が物理関係の大先輩の先生方とともに御出席になり、先輩としてテーブルスピーチをやられたことである。藤澤先生は私の学生時代の先生ではあるが、実は講義は一ヶ月しか受けず、そのうち私は病気をして休んでしまい再び大学へでたときは先生は既に停年で御退職になつていられたのでことさら印象が深かつたのである。

昭和八年から私は大阪へきてしまつて会の事務からは直接には、はなれてしまつたので、それ以後については書かない。それは若い方々がやつて下さつているので、それ以後の事は更にそういう方々に語つていただきたいと思うのでここで筆を擱く。

東京数学会社創立 80 周年に際して

彌 永 昌 吉

本年(1957)は、明治10年(1877)に本会の前身東京数学会社が創立されてから、ちょうど80年目に当たる。かつて昭和3年(1928)には、日本数学物理学会の時代であつたが、創立50年を祝する記念大会が行われ、席上中村清二委員長が会の歴史をかえりみ、力のこもつた演説をされた。その記録は、数物会誌第2巻1号に載つている。このたびは80周年を記念する集会は特に行われなかつたけれども、この機会に高木先生はじめ諸先生から本会の歴史に関するお話を伺うことができ、あるいは御寄稿をいただくことができ、われわれの反省の資ともなり、将来へのはげみともなるお言葉の数々を本誌に載せることができたのを喜ばしく思う。

会が永い歴史を経て来たことについては、われわれはまず諸先輩に感謝しなければならない。明治10年といえは、私たちの生まれるよりもずつ

と以前のことであるから、当時の社会情勢、あるいは世界のありさまについては、今日われわれに残された史料によつて想像するほかはない。察するに、当時、世界の学界とわが国の学界との水準の差は、大きなものであつたであろう。そのことを自覚しつつも、学問への深い熱意をもつて進歩への道を歩まれた開拓者の意気は、東京数学会社の創立者の一人である神田孝平の、東京数学会社雑誌第1号、‘題言’からも読みとることができる。本号 p.10 には、その‘題言’全文を掲載し、その後、今日までの会の変遷上の主な時期については、福富節男君の編集された年表を次頁以下に載せる。

日本数学会として独立したのは、昭和21年(1946)であつた。本誌第1号に当時の経緯に関する記事があるが、それから10年ばかりの間にも、社会あるいは学界の情勢がかなり変つて来てい

る。全般的に見て会が発展の一途をたどつて来ているのは、喜ばしいが、まだできていないこともたくさんある（本誌8巻3号所載賛助会員募集趣意書参照）。事務上その他のことでわれわれの至ら

なかつたことも多いであろう。科学技術振興が特に強く叫ばれている今日、われわれの会も、会員全体の会としますます発展するよう、われわれも努めてゆきたいと思つている。

年

表

明治10年(1877) この年の始め、在京の数学者が相会して‘数理の開進を計る’ことを協議した。

9月 神田孝平、柳橋悦主唱となり**東京数学会社**を創立することとなる。神田、柳両氏が社長となり、塚本明毅、岡本則録、川北朝鄰、荒川重平、寺尾寿、菊地大麓など大いに会務に務めた。

10月 この月から毎月定会を湯島昌平館で開くことになった。ドイツ人センデル氏の講義がその嚆矢である。

11月 **東京数学会社雑誌**第1号を発行した。和紙にて菊判半載、14葉(28頁)縦組木版刷。以後毎月発行されることになった。(翌年第6号から二十数葉となった)。専ら‘社員’からの設問と解答とを掲載し、後には訳語会で決定した訳語も収録した。第1号、第2号には問題は次のような分類の下に収められている。

(1) 算数雑問 (2) 代数学雑問 (3) 幾何学 (4) 三角術 (5) 代微積雑問 (6) 静力学 (7) 動力学 (8) 英国大学校数学試験問題 (9) 本朝数学。分類の名称は7号から(4)が三角法に、(5)が微分積分法に、(6)、(7)が重学に改められ、円錐曲線法、代数幾何学、微分方程式が順次加えられるようになった。

社員たることを希望するもの114名に及んだ。

12月 社則を定める。わずか6ケ条で、常員の他に、例会の際の臨時出席者を臨時員と呼ぶといった具合に、会員の種別と雑誌配布についての簡単な規定である。常員は入社金1円を納め、毎月20銭の会費を納めることとなった。常員となったもの55名。

明治11年(1878) 3月 柳橋悦洋行のため岡本則録社長となる。

9月 東京数学会社雑誌第9号から活版刷となった。

11月 以後例会では、毎回講義、演説をすることになり、岡本則録、菊地大麓、川北朝鄰、大伴兼行らが講義を行つた。

明治12年(1879) 10月 このころ会の不振を挽回するため委員を設けて雑誌の編集を行い、書記生を置いて雑誌の郵送、会費の収納を行わせることにきめた。この月会員66名。

11月 委員12名を選挙した。以後委員や有志が日本橋区呉服町‘柳屋’に会して雑誌発行について協議をした。

明治13年(1880) 4月以後京橋区日吉町の共存同衆館で例会を行うことになる(翌年9月からは東京大学にて)。

5月 社則を改訂して23ケ条から成るものとした。

第1条 本社ハ数学測量天文ノ學術ヲ研究鍊磨シ数理ノ開進ヲ以テ専務トス。

第3条 常員ハ会場ニ出席スル者通信員ハ遠國ニ在テ社則ヲ遵守スル者客員ハ数理有名家ニシテ社員協議ノ上社員に聘スル者。

第5条 毎月第一土曜日ヲ以テ集會定日トシ午後一時ヨリ集合ス。

第6条 社員ハ毎月定費トシテ一円ヨリ多カラス式拾銭ヨリ少ナカラサル金ヲ納ムルコトヲ要ス。

第9条 本社ハ数理ヲ研究スルカ為メニ設ケタル者ナレバ数学ヲ教授スルコトヲ為サズト雖ドモ社員ハ勿論広ク世間ノ質問ニ応シ之ガ答弁ヲ為スベシ質問ノ事項通常ナルモノハ学務委員之ヲ担当シ六十日ヲ限リ之ヲ答弁ナシ其事項高尚ナル者ハ普ク社員ニ通知シ其答ヲ募リ九十日間ヲ限リ質義者ニ答フ可シ其理深遠ニシテ解シ難キ者ハ広ク字内ノ数理大家ニ解義ヲ請フテ質義者ニ答フルコトアルベシ。

第10条 新發明ノ測器類及ヒ其他ノ器械ヲ試験シ其利害得失ヲ弁明スル等ノコトモ又前条ニ比準スヘシ。

第11条 公私立中学校ニ於テ数学教員撰挙ノ時其試験ヲ本社ニ請フトキハ委員協議ノ上之ヲ弁スベシ。

第12条 数学教員測量者等ノ雇入試験ヲ本社ニ請フトキモ前条ニ比準スベシ。

第17条 社長ハ本社一切ノ事務ヲ総理シ委員以下ヲ誘導シ尽力其當ヲ得セシメ本社興廃存亡ヲ以テ自任ス。

その他 入社は社員1名以上の保証のあるものについて委員の協議によつて許可され、入社金1円を収めること。毎月雑誌一号を発行して社員に配達すること。学術委員、事務委員を設けることなどが定められた。

7月 社則 第9条にある学務委員を定め、受持を次のように定めた。

算術・代数学：山本信実、川北朝鄰

幾何・三角法：中川将行、荒川重平、伊藤直温

球面三角法・星学・航海学：磯野 健、肝付兼行

代 微 積：岡本則録、赤松則良

三軸法・重学：菊地大麓

本 朝 数 理：大村一秀、福田理軒、川北朝鄰

(測器類の試験：磯野 健、肝付兼行)

8月 訳語会会則を定め、9月から毎月共存同衆館で訳語会を開いた。9月の訳語会では始めて次の訳語を議定した。Quantity 量, Number 数, Abstract number